

語彙借用の分類および術語について

飯 嶋 一 泰

借用語のみではなく広く語彙借用全般をあつかう研究は、今世紀前半まではごく一部の人の関心をひいたにすぎないが、1949年から1953年にかけて、W. Betz の „Deutsch und Lateinisch“, E. Haugen の „The Norwegian Language in America“, そして U. Weinreich の „Languages in Contact“ というそれぞれエポックメイキングな研究書が刊行されるとともに、にわかに脚光を浴びるようになった。そして、それ以後今日に至るまで、各言語あるいは各テキストの借用語彙を対象とする個別研究はもとより、その研究のための方法や術語に関する考察も続々と発表されている。これらの考察はそれぞれ何らかの新しい視点を提供するものではあるが、それと同時に相当数の術語を生ぜしめ、結果として「術語のカオス」(Carstensen 1968: S. 32)とも言うべき状況をひき起してしまっている。以下、この術語上の混乱を整理しつつ、語彙借用という現象の言語形式的側面を分析してゆきたい(社会的・心理的等の観点からの考察は後にゆずる)。その際、ドイツ語圏を中心に最

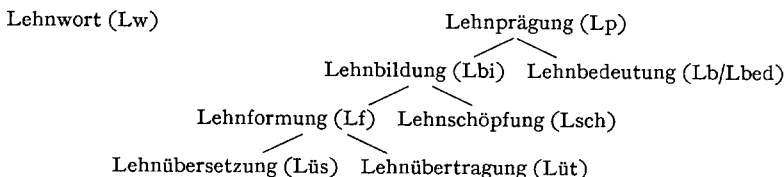
も広く普及し、なおかつ数多くの個別研究への適用によってその有効性が証明されている Betz の方法を基本に据えることが、これ以上の混乱をまねかないための最善策となるう⁽¹⁾。

Betz による語彙借用の分類は、下図が示すように借用形式に基づく明快な二分法から成り立ち、また各範疇の名称もすべて „Lehn-“ による複合語に統一されている。しかも、Lehnwort をのぞいて、それぞれの名称が借用のプロセスと成果の両者を表わすことができる⁽²⁾。したがって、理論的な不備があるかどうかは別として、少なくとも実際の語彙研究に適用するには、きわめて利便性の高いものであると言えよう。

まず、Lehnwort と Lehnprägung への二分であるが、これは他言語の語彙素が移入される(前者)か、意義素のみが移入される(後者)かによって区別される。

Lehnwort に関してはことさらに述べるまでもないが、上述のとおり、この術語のみは

図



(Betz 1951: S. 27 による)

借用のプロセスを指すことができない。Betz はそのための特別な術語を提供していないので、Schumann (1965: S. 62) の *Materialentlehnung* や Duckworth (1977: S. 40) の *Übernahme* のような名称を必要に応じて用いることになる。なお、ドイツ語圏においては、*Lehnwort* を受け入れ言語の音韻・書記・文法体系への適合の度合、あるいは日常語における通用度にしたがって狭義の *Lehnwort* (Betz 1959: S. 128 では *assimiliertes Lehnwort*; Seebold 1981: S. 198 では *Beutewort*!) と *Fremdwort* とに分類することがしばしばある。しかし、この両者の相違は段階的なものであり、区分のための厳密な基準を設定することは困難である。しかも、この区分は借用の現象自体ではなく、借用された語のその後の発展に関するものであり、また言語純化主義的目的でもないかぎり実用的価値も存在しないので、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

Lehnprägung は Betz (1949: S. 27) によれば、「音的なものとか語素材そのものではなく、語素材の形成と意味、形式と内容におよぼされる、一言語から他言語へのすべての影響」と定義される⁽³⁾。この術語は、ドイツ語圏ではほぼ完全に定着した観があるが⁽⁴⁾、Duckworth (1977: S. 51) は、*Lehnprägung* のかわりに *Ersetzung* をあて、*Lehnprägung* は Betz の *Lehnbildung* (後述) の意味で用いることを提唱している。その理由は、*Prägung* という語、そして特にその英訳である *coinage* が新たな造語を想起させるので、*Lehnbedeutung* (後述) がその概念から除外されるおそれがあるということである。このことは、後でふれる *Lehnprägung* の日本語訳に「借用造語」という誤訳があることから確かに納得される。しかし、少なくともドイツ語に関して言えば、*prägen* には „gestalten“ のほかに „mit einem bestimmten Ge-

prägen, einer bestimmten Eigenschaft versehen“ (Wahrig: Dt. Wb.) という意味もあり、概念規定さえきちんと行なえば、しいて新しい術語を導入するまでもないと思われる。

次に、*Lehnprägung* が、新たな造語をともしなうか否かにしたがって、*Lehnbildung* と *Lehnbedeutung* に二分される。

Lehnbildung とは「他言語のモデルの刺激による、自言語の素材からの語の新形成」である (Betz 1951: S. 25)。この *Lehnbildung* は、モデルへの形式上の依存の有無にしたがって *Lehnformung* と *Lehnschöpfung* とに二分され、前者はさらにその依存度の大小にしたがって *Lehnübersetzung* と *Lehnübertragung* とに二分される。

Lehnformung⁽⁵⁾ の第一のタイプである *Lehnübersetzung*⁽⁶⁾ は Betz (1949: S. 27) によると「モデルの厳密な逐語訳 (*Glied-für-Glied-Übersetzung*)」と定義される。つまり、複合語・派生語・接頭辞形成語のように二つ以上の構成要素からなる他言語の語の各構成要素を、それぞれ意味的に最も良く対応すると考えられる自言語の形態素を用いて再現することによって、新たな語を創造するプロセスである。例：仏 *grand-père* → 独 *Großvater*。しかし、ここにおいても術語の混乱が若干見られる。たとえば、Kohls (1969: S. 422) は *Lehnübersetzung* を Betz の *Lehnformung* の意味で用い、Betz の *Lehnübersetzung* に対しては *konforme Lehnübersetzung* という独自の術語を考案している。また、Ruh (1956: S. 83 f.) も同様に *Lehnübersetzung* を広義に用い、Betz のそれに対しては *Kontrafaktur* という語をあてている。しかし、これらの術語は何らの新しい概念も提供せず、また Betz の術語に比べて実用性が高いとも考えられないので、排除されてしるべきであろう。

さらに、*Lehnübersetzung* との関連で考え

なければならないのは、いわゆる *Lehnwendung* と *Lehnformel* (*Lehnfügung*) の問題である。前者は Betz 自身 (1949: S. 28) による術語で、仏 *faire la cour*→独 *den Hof machen* のような *Redensart* の模倣を意味し、後者は Feist (1953: S. 177) によるもので、羅 *spiritus sanctus*→古高独 *heilag geist* のような名詞句の模倣を意味する。しかし、語彙化された構成物であるかぎり、句も「語」として認められるものであるから (Reichmann 1976: S. 8)、ここでも *Lehnübersetzung* と言うべきである。そうすれば、独 *Kindergarten*→露 *детский сад*, 露 *стенная газета*→独 *Wandzeitung* のような「複合語→句」というケースもよりの確に分類することができよう (Fleckenstein 1968: S. 220 f.)。

Lehnformung のもうひとつのタイプ *Lehnübertragung*⁽⁷⁾ は、「他言語のモデルの一部分のみが厳密に模倣され、他の部分についてはより自由で独自の処置がなされる借用形成」である (Betz 1951: S. 25)。例: 羅 *paeninsula*→独 *Halbinsel*。ここでも、Kohls (1969: S. 442) は *inkonforme Lehnübersetzung* という独自の術語を提供しているが、考慮に入れる必要はない。

この *Lehnübertragung* に関して有益な提言をしているのは Lauffer (1976: S. 31 f.) である。彼は Betz の言う「より自由で独自の処置」が具体的にどのようなものを指すかを考究し、その点を基準にして *Lehnübertragung* を次の四つの下位グループに分類している。まず、モデルとなる語の一部分が再現されない場合を *defiziente Lehnübertragung* と言う (羅 *incarnatio*→古高独 *lihhamhafti*)。そして、一部分が付加される場合を *additive Lehnübertragung* (羅 *nocturna*→古高独 *nahtsang*)、各部分の並べ方が変わる場合を *syntagmatische Lehnübertragung* (羅 *ordo generis*→古高独 *kunnizala*)、モデルとなる語

の一部分に対してそれと意味的に異なる形態素が与えられる場合を *variierende Lehnübertragung* (羅 *gymnosophista*→古高独 *spiliwiso*) と呼んでいる。これらのうち、最後に述べたものは、意味的相違を示す形態素の種類に応じて、さらに *präfixvariierend*, *suffixvariierend* および *lexemvariierend* に分類される。実際の語彙研究に適用するには、この *Lehnübertragung* の下位分類は煩瑣にすぎないかも知れないが、少なくともこの借用形式の概念規定のためには益するところがある。なお、Lehmann (1972: S. 63 ff.) も *Lehnübertragung* を *formale Abweichung*, *semantische Abweichung*, *Abweichung sowohl in semantischer als auch in formaler Hinsicht* に分類し、それらをさらにいくつかのグループに分けているが、Lauffer の分類の方がより明快であるように思われる。

ここで、従来最も多く議論が戦わされてきた *Lehnschöpfung*⁽⁸⁾ に関して論じなければならない。これを Betz (1951: S. 26) は、「他言語のモデルが、単に自言語における翻訳語の新形成への刺激を与えるだけで、いかなる形式的模倣もなされないような借用形成」と定義している。例: 仏 *milieu*→独 *Umwelt*。ところが、このプロセスを、Haugen (1953: S. 403),⁽⁹⁾ Schumann (1965: S. 66 f.), Seebold (1981: S. 199) および Höfler (1981: S. 149 ff.) は借用の範疇から除外している。というのは、この場合、他言語からのいかなる影響も存在せず、ただ単に外来の事物ないしは概念に対して独自の発想に基づく名称が与えられているにすぎないからだという (Schumann 1965: S. 66)。結局、Betz の定義における「刺激 (*Anstoß*)」の出どころが鍵で、これが実際に「他言語のモデル」に由来するのか、それともその事物や概念自体に由来するのか、という根本的問題の解釈次第でどちらの結論も出てくることになる。ここで

は判断をさしひかえるが、いずれにせよこの Lehnerschöpfung が, Lehnübertragung やさらには Lehnübersetzung に比べて, モデルとなる語に対してはるかに疎遠な関係しか持たず, 語彙借用と自言語内での改新の境界周辺に位置することは確かであろう。なお, Coleman (1966: S. 73 f.) は, この範疇を語彙借用には含めているが, „Lehn“ と „Schöpfung“ という両概念は相容れないとして, Lehnwortersatz という術語を用いることを提唱している。しかし, Schottmann (1977: S. 29) も指摘しているとおり, もしこれが既存の借用語に対する Ersatz としての造語と考えられるなら, 語彙借用のプロセスとは何の関わりもないことになるし, Lehnwort の移入の代替措置と考えられるなら, すべての Lehnprägung が Lehnwortersatz と名づけられるであろう。

ここで Lehnbildung の諸タイプの概観を終え, Lehnbedeutung⁽¹⁰⁾ の検討に移りたい。Betz (1949: S. 21) はこれを, 「すでに存在する語が他言語のある語の意味を得る」ことと定義しているが, これでは十分に言いつくされているとは思えない。なぜなら, この定義だけでは, 一言語の任意の語が他言語の任意の語の意味を借用できるかのような印象を与えてしまうからである。実際にはそのようなことは起らず, モデルとなる語と意味を借用する語とが同一視されるための何らかの契機が存在しなければならない。Haugen (1950: S. 400) はこの点を明確に定式化して, extension, つまり Lehnbedeutung を次の三つのタイプに分類している。まず, 他言語の語と自言語の語の同一視の根拠が音における類似性である場合は, homophonous extension (homophone Lehnbedeutung—Schumann 1965: S. 67 ff. による訳語, 以下同様) と呼ばれる。例: 英 bran「糠」→アメリカ・ノルウェー語 brand「火」+「糠」。そして, その根

拠が音と意味の両方における類似性である場合は, homologous extension (homologe Lehnbedeutung) と呼ばれる。例: 英 realize「実現する, 理解する」→独 realisieren「実現する」+「理解する」。最後に, その根拠が意味のみの類似性である場合が synonymous extension (synonyme Lehnbedeutung) である⁽¹¹⁾。例: 仏 canard「鴨, 誤報」→独 Ente「鴨」+「誤報」。これらのうち, homophone Lehnbedeutung は, むしろ Lehnwort が移入される際に, 受け入れ言語における類似の音形を持つ既存語の影響によって, それと同じ音形を獲得したものと考えられるべきかも知れない (Schottmann 1977: S. 31 f.)。

Lehnbedeutung の分類に関する他の試みとしては, Gneuss (1955: S. 21 ff.) の analoge Lehnbedeutung と substituierende Lehnbedeutung がしばしば考察の対象となっている。前者は, 上述の canard→Ente の場合のように, 一言語において A (ここでは「鴨」という意味を持つ語 x が, 他言語において A および B (ここでは「誤報」という意味を持つ語 y からの類推によって, B という意味を獲得するプロセスである。つまり, 意味上の共通項が二つの語の同一視の根拠となるようなケースである (semantische Analogie; このほかに phonetische Analogie も挙げられている)。一方, 後者は二つの語の間にこのように明確な意味上の共通項が存在せず, ただ漠然とした意味的近似性が存在する (と考えられる) ために, 同一視がなされるケースである。例: 羅 discipulus「弟子, 使徒」→古英 cniht「召使」+「使徒」。しかし, Schottmann (1977: S. 31) も指摘しているとおり, 意味の近似性・共通性を計るための確実な基準を設けないかぎり, このような区分は意味がないと言えよう。さらに別の分類としては, Schumann (1965: S. 68) の gliedübersetzte Lehnbedeutung がある。この範疇は, 一言

語の語と他言語の語の間に語の構成上の一致が見られ、これが *Lehnbedeutung* によるものか *Lehnübersetzung* によるものかが不明なケースをひとまとめにしたものである。しかし、これは借用のプロセスの判定に際しての証明可能性の問題であって、プロセス自体には関わりがないことなので、このような概念を導入することは適切ではない。また、Siebert (1971: S. 21 ff.) は、借用した意味が後に失われてしまう場合を *zeitweise Lehnbedeutung*、旧来の意味が借用した意味と並存している場合を *teilweise Lehnbedeutung*、そして借用した意味が旧来の意味を駆逐し、しかも後の時代にまで保持されている場合を *Lehnbedeutung im eigentlichen Sinne* と呼んでいるが、これも借用語彙のその後の発展に関わることがらであり、借用のプロセスには無関係である。

以上で語彙借用の主要な諸形式の概観を一応終えたことになるが、実はもうひとつやや特殊なケースが存在する。それは *Lehnwort* の移入と *Lehnprägung* の中間的現象、つまり他言語の語の一構成要素が語形として借用され、同時に他の構成要素が自言語の形態素によって再現される現象である。Betz (1949: S. 23) はこれを *Teillehnwort* と呼んで、*Lehnwort* の範疇に含めている⁽¹²⁾。しかし、Schottmann (1977: S. 22f.) も述べているように、これを *Lehnprägung* に含めることも同程度に可能であり、ここでは二分法に拘泥せずに、語彙借用の第三のグループとして独立させるべきかも知れない。なお、*Teillehnwort* の移入のプロセスは *Teilübersetzung* (Betz 1949: S. 22) ないしは *Teilersetzung* (Duckworth 1977: S. 40) と呼ぶことができる。例：独 *Baumwolle* → ポーランド *bawełna* (Baum → ba のみが転移)。しかし、このような現象はかなり稀で、一見 *Teillehnwort* と思われるものでも、実際には *Lehnwort* を

構成要素として含む *Lehnbildung* か、一言語内の独自の造語である場合が多い。たとえば、古高独 *meistartuom* は羅 *magistratus* の *Teil-lehnwort* のように見えるが、実は *meister* はそれ以前に借用されていたもので、この造語がなされた時点では古高ドイツ語の語彙に組みこまれており、したがって当該の造語は *magistratus* を既存語を以って再現した *Lehnübersetzung* と見なされる。一方、独 *Showsendung* は、外形上外来の要素と自言語の要素から成り立っているというだけで、他言語のモデルを模倣した造語ではないから、単なる一言語内での改新ということになる。Toth (1980: S. 9f.) は前者を *hybride Lehnbildung*、後者を *hybride Bildung* と呼んで区別している。

最後に、今まで述べてきた借用形式の分類とあわせて Betz (1949: S. 27; 1951: S. 26 f.) が提案している *bereichernde Entlehnung* と *entwickelnde Entlehnung* の区分に関して簡単にふれておく。前者は、その語ないしは意味が他言語からの刺激なしには生じえなかったと考えられる場合であり（例：羅 *eremita* → 独 *Einsiedler*）、後者は、他言語の影響なしでもいつか自言語内で生じうると考えられる場合である（例：羅 *paeninsula* → 独 *Halbinsel*）。しかし、問題が可能性の領域に属し、判断のための客観的基準が求められないので、一般にこの区分は受けいれられていない (Lauffer 1977 等を除く)⁽¹³⁾。

以上、語彙借用の分類と術語における問題点をごく簡略に見てきたわけだが、このように基礎的なことがらにおいて研究者間の意見のまとまりが見られないのは残念である。しかし、1980年代に入ってから、幸か不幸かこの分野での「独創的」な発表はやや下火になったようである。これからは、新奇な術語の氾濫ではなく、真に実りある議論が展開さ

れることを期待したい。

付説: Betz の術語の日本語訳の問題

ここで, Betz の術語の日本語訳について見てゆきたい⁽¹⁴⁾。いまだに定訳が確立されていないが, 下表からも明らかのように, 川口洋氏の論文『Williram の《雅歌注解》における形式借用語について』(学習院大学文学部研究年報 15, 1968, S. 89—110)に見られる訳語が全般的にすぐれている。ただし, 最上位概念である Lehnprägung の訳語が欠けている点と, 原語が首尾一貫 „Lehn-“ で始まっているのに対して訳語の形式に統一性がない点に改善の余地があらう。国松孝二氏他によるモーザー『ドイツ語の歴史』の邦訳(1967)と岩崎英二郎氏他によるポーレンツ『ドイツ語史』の邦訳(1974)は, Lehnprägung を「借用造語」と訳しているが, 「借義語」をも含む概念に「造語」という名称を与えてよいものであろうか? 一昨年刊行された『小学館独和大辞典』にはこの語は収録されていないが, 同書には Lehnbildung=Lehnschöpfung という記述があり, 首をかしげたくなる。表にあげた以外にも, 福田幸夫氏によるヴェンドルシュカ『言語間言語学』の邦訳(1974), 神鳥武彦氏によるワインライヒ『言語間の接触』の邦訳(1976), 松浪有氏他編『大修館英語学辞典』(1983)等に訳語の試みが見られるが, いずれも一長一短のよ

うである(ちなみに神鳥氏は Lehnübertragung を「借入言い回し」, bereichernd を「濃化」と訳すなどの誤りを犯している)。最後に, 『独和大辞典』と同じく一昨年刊行された下宮忠雄氏他著『言語学小辞典』を見ると, ここには Betz の分類法が一切紹介されていない(この点については諏訪功氏もドイツ語教育部会会報 30 号で指摘している)。今後版を重ねる際には, この点についての増補が期待される。

注

1. 本稿は 1979 年に早大独文専攻院生雑誌「Angelus Novus」7 号に発表した『語彙干涉に関する考察』と 1987 年 5 月 20 日に一橋大語研例会で行なった口頭発表『借用語彙の研究について』をもとに, 増補・訂正をほどこしたものである。
2. もちろんこれを術語上の欠陥と見なすこともできる(Carstensen 1968: S. 33; Tesch 1978: S. 114)。
3. したがって, これは旧来一般に用いられてきた広義の仏 calque, 露 калька (калькирование) におおよそ相当する(たとえば, Sandfeld Jensen 1912: S. 16 ff. や Розенталь/Теленкова 1976: S. 141 f.)。ただし, 仏 calque はより狭く Lehnübersetzung, ないしは Lehnformung の意味で使われることが多い(注 6 参照)。なお, Haugen は Lehnprägung にほぼ一致する範疇として loanshift をたてている。

表

	国松他(1967)	川口(1968)	岩崎他(1974)	大独和(1985)
Lehnprägung	×借用造語	——	×借用造語	——
Lehnbedeutung	借義語	意味借用(語)	借義語	借義(語)
Lehnbildung	借用形成語	借用形成語	借用形成語	×=Lehnschöpfung
Lehnformung	——	形式借用語	×語形借用語	——
Lehnübersetzung	翻訳借用	直訳語	直訳借用語	直訳借用(語)
Lehnübertragung	意識借用	部分的意識語	意識借用語	意識借用(語)
Lehnschöpfung	×借用新造語	意識語	自由訳語	×借用新造語

×は不適切な訳語ないしは説明

- 参考文献（邦語文献および辞典類は省略）

- F. Maurer/F. Stroh (Hrsg.): Deutsche Wortgeschichte, 2. Aufl. Berlin. Bd. 1, S. 127-147.
- Carstensen, Broder (1968): Zur Systematik und Terminologie deutsch-englischer Lehnbeziehungen. In: H. E. Brekle/L. Lipka (Hrsg.): Wortbildung, Syntax und Morphologie. Festschrift zum 60. Geburtstag von Hans Marchand am 1. Oktober 1967. The Hague. S. 32-45.
- Coleman, Evelyn S. (1966): Zur Bestimmung und Klassifikation der Wortentlehnungen im Althochdeutschen. In: Zeitschrift für deutsche Sprache 21, S. 69-83.
- Deroy, Louis (1956): L'emprunt linguistique. Paris (²1980).
- Dobbie, Elliott V. K. (1957): Rezension von H. Gneuss: Lehnbildungen und Lehnbedeutungen im Altenglischen. In: Word 13, S. 172-175.
- Duckworth, David (1977): Zur terminologischen und systematischen Grundlage der Forschung auf dem Gebiet der englisch-deutschen Interferenz. In: H. Kolb/H. Lauffer (Hrsg.): Sprachliche Interferenz. Festschrift für Werner Betz zum 65. Geburtstag. Tübingen. S. 36-56.
- Feist, Ekkehard (1953): Der religiöse Wortschatz der althochdeutschen Tatan-Übersetzung in seiner Abhängigkeit vom Latein der Vorlage. Studien zur Lehnwortforschung. Diss. masch. Freiburg.
- Fleckenstein, Chr. (1968): Zu einigen Fragen der Lehnprägung und ihrer Anwendung im Russischen. In: Zeitschrift für Slawistik 13, S. 267-276.
- Gneuss, Helmut (1955): Lehnbildungen und Lehnbedeutungen im Altenglischen. Berlin 1955.
- Haugen, Einar (1953): The Norwegian Language in America. A Study in Bilingual Behaviour. Bloomington (²1969).
- Höfler, Manfred (1981): Für eine Ausgliederung der Kategorie „Lehnschöpfung“ aus dem Bereich sprachlicher Entlehnung. In: W. Pöckel (Hrsg.): Europäische Mehrsprachigkeit. Festschrift zum 70. Geburtstag von Mario Wandruszka. Tübingen. S. 149-153.
- Klajn, Ivan (1972): Influssi inglesi nella lingua italiana. Firenze.
- Kohls, Siegfried (1969): Zur Typologie russischer Lehnprägungen im Deutschen. In: Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität zu Berlin, Gesellschafts- und sprachwissenschaftliche Reihe 18, Heft 3, S. 421-425.
- Lauffer, Hartmut (1976): Der Lehnwortschatz der althochdeutschen und altsächsischen Prudentiusglossen. München.
- Lehmann, Heidi (1972): Russisch-deutsche Lehnbeziehungen im Wortschatz offizieller Wirtschaftstexte der DDR (bis 1968). Düsseldorf.
- Martinet, André (1960): Elément de linguistique générale. Paris (⁶1971).
- Reichmann, Oskar (1976): Germanistische Lexikologie. 2. Aufl. von »Deutsche Wortforschung«. Stuttgart.
- Ruh, Kurt (1956): Bonaventura deutsch. Ein Beitrag zur deutschen Franziskaner-Mystik und Scholastik. Bern.
- Sandfeld Jensen, Kristian (1912): Notes sur les calques linguistiques. In: Festschrift Vilhelm Thomsen. Leipzig. S. 166-173.
- Schottmann, Hans (1977): Beschreibung der Interferenz. In: Betz-Fs. (s.o.) S. 13-35.
- Schumann, Kurt (1965): Zur Typologie und Gliederung der Lehnprägung. In: Zeitschrift für slavische Philologie 32, S. 61-90.
- Seebold, Elmar (1981): Etymologie. Eine Einführung am Beispiel der deutschen

- Sprache. München.
- Siebert, Eberhard (1971): Zum Verhältnis von Erbgut und Lehnwort im Wortschatz Otfrids von Weissenburg. München.
- Tesch, Gerd (1978): Linguale Interferenz. Theoretische, terminologische und methodologische Grundfragen zu ihrer Erforschung. Tübingen.
- Toth, Karl (1980): Der Lehnwortschatz der althochdeutschen Tatian-Übersetzung. Würzburg.
- Weinreich, Uriel (1953): Languages in Contact. Findings and Problems. The Hague (1979).
- Еремина, К. Н. (1980): К проблеме языковых контактов. Европейизмы в современном персидском языке. Москва.
- Розенталь, Д. Е./Теленкова, М. А. (1976): Словарь-справочник лингвистических терминов. Изд. 2-е. Москва.